
コードギアス AVENGER ~ 狂王のライ ~

朧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス A V E N G E R 狂王のライ

【Nコード】

N 5 4 0 7 Y

【作者名】

朧

【あらすじ】

ライはかつての知り合い、A・Aのお陰ですべての記憶を取り戻した。

そしてライは、ゼロの持つ【ギアス】と呼ばれる能力によって、ライは愛した部下をその手にかけた。

ライの憎しみの炎は、日を増すごとにその勢いを強めていった。

【ブラック・リベリオン】から1年。

【黒の騎士団】リーダー、ゼロが復活したのだった。

オリキャラ・オリKMF紹介 未完成

ライア・ファグラレーヴ

誕生日

皇暦????年?月?日

(原作開始時、18?)

血液型

B型

身長177cm

搭乗騎

アルトウール・アヴェンジャー

備考

アルヴァン・ファグラレーヴ侯爵の義理の息子で、神聖ブリタニア帝国で帝国最強の騎士【ナイトオブブラウズ】の1人。

師でもあるノネット・エニアグラムにその実力を評価され、着実に実績を重ね、【ナイトオブブラウズ】となった。

【ブラック・リベリオン】時には、最大の抵抗エリアだったエリア11に赴任。

【黒の騎士団】を筆頭とした、抵抗勢力の殲滅にあたった。

だが、【黒の騎士団】との最終決戦のトウキョウ決戦において、ゼ

口の【ギアス】によって操られた直属諜報員ティズ・ラストリアを殺害。

かつての憎悪の気持ちを理解し、ゼロへの復讐を誓う。

アルシェラ・イストリア

誕生日

皇暦1997年9月6日

（原作開始時、21）

血液型

A型

身長

172cm

3サイズ

92、60、86

搭乗騎

ブリュンヒルデ

備考

今は退役したが、軍人だったジョー・イストリア伯爵を父に持つ女

性。

彼女自身のKMF操縦技術は高いが、前線で戦うことは珍しい。

基本的には、補佐として動くのを得意としている。

KMFよりも、情報収集や政治的戦略などの分野を得意としている。

その実力を評価し、EU方面軍からライが直属部隊の【ワルキューレ・ナイツ天女騎士】へと引き抜かれる。

トウキョウ決戦においても、その指揮の才能を遺憾なく発揮し大部隊を手足のように使い勝利に貢献。

エリア11での後処理を終えた後、先に帰還していたライの後を追ワルキューレ・ナイツい【天女騎士】のメンバーと共に帰国した。

ジル・シウィリア

誕生日

皇暦2000年3月10日

（原作開始時、18）

血液型

AB型

身長

168cm

3サイズ

89、61、83

搭乗騎

ブリュンヒルデ

備考

ギイ・シウィリア伯爵を父に持つ、一卵性双生児の双子の姉である。実直で非常に真面目な性格をしており、何かと抱え込むことが多い。同時に、伯爵としての父の名を汚さないように自らを常に律している部分も見受けられる。

指揮能力に長け、部隊の指揮をすることが多い。

そんな一面とは裏腹に、趣味は料理やティディベア集めといった女の子らしい一面もある。

トウキョウ決戦時においては、寡兵ながらも奇策を用い数の多い敵に勝利を重ねた。

エリア11での後処理を終えた後、先に帰還していたライの後を追
フルキューレ・ナイツ
い【天女騎士】のメンバーと共に帰国した。

ライの危うさを心配している。

ウル・シウィリア

誕生日

皇暦 2000年3月10日
(原作開始時、18)

血液型

O型

身長

158cm

3サイズ

85、64、81

搭乗騎

ゲルヒルデ

備考

ギイ・シウィリア伯爵を父に持つ、一卵性双生児の双子の妹である。

真面目な姉とは違い、イタズラ好きで自由奔放な性格をしている。

そして、戦場では姉ほど経験が高いわけではないのだが、何故かよく当たる勘を頼りに動いている節もある。

戦場では、指揮を姉に任せ、自らは前線でその力を揮う。

家族が何より大事で、その次にライが大事とのこと。

それが愛情なのかどうかは、自分でもよく分かっていない様子。

トウキョウ決戦時においては、姉ジルの指揮の下で奮戦。

【黒の騎士団】KMFをことごとく撃破していった。

エリア11での後処理を終えた後、先に帰還していたライの後を追
フルキューレ・ナイツ
い【天女騎士】のメンバーと共に帰国した。

セレスティア・ファグラレーヴ

誕生日

皇暦 2001年8月29日
(原作開始時、17)

血液型

O型

身長

165cm

3サイズ

87、59、84

所属

帝都守備隊第39連隊連隊長

備考

アルヴァン・ファグラレーヴ侯爵を父に持ち、ライを義兄とするブリタニア軍人。

帝都ペンドラゴン守備の任に就いており、帝都守備隊第89連隊副隊長の地位に就いている。

帝都守備隊第39連隊連隊長へ、同時に階級も中佐に昇進している。

依然として帝都守備の任に就いており、その容姿の高さもあったか半ばアイドル化している部分も見受けられる。

本人は非常に嫌がっている。

蘭 キキヨウ

誕生日

皇暦 1997年4月9日

（原作開始時、22）

血液型

A型

身長

171cm

3サイズ

90、63、89

搭乗騎

ユーウェイン

所属

ナイトオブツィー

備考

出身が日本のナンバーズ出身者だが、強さを第一に考えるブリタニアで、『ナイトオブ라운ズ』まで上り詰めた女性。

スザクと違いブリタニアを変えようとは思っておらず、日本が負けたのも「ただ弱かったから」と考えており日本への思い入れはほぼ皆無、ブリタニアの国是「弱肉強食」も肯定している。

戦場では敵に対して情け容赦は欠片も無く、ただ無慈悲に機戒のように淡々と敵の命を刈り取って行く。

性格は冷静沈着で単独行動を好み、同じ라운ズのメンバーとも話すことはほとんど無い。

ライを라운ズ就任時に初めて見てから、何か感じるものがあるのか、ライだけは自分から話しかけたりする。

KMF戦での実力も高いが、彼女自身の戦闘力も高い。

持ち前の高い身体能力を生かし、身体の各所に仕込んでいる暗器を使って戦うことを得意とする。

キキヨウは味方からは『戦姫』、EUからは『冥府の鎌』の異名をとるほど恐れられており、その鎌で敵をことごとく屠ることでも有名である。

キキヨウ
桔梗の花言葉は、清楚・気品。

最後に、苗字だが「蘭」でアララギと読む。

クリストフ・ハルウエン

誕生日

皇暦1988年11月27日

（原作開始時、30）

血液型

B型

身長

191cm

体重

79 kg

所属

『カリブルヌス』

備考

ハルウエン伯爵家当主でロイドの友人、KMF開発などのその筋の世界ではかなりの有名人。

ロイドの友人というだけあって、彼もおかしいところがある。「奇人のクリス」、「変人クリス」など、不名誉な単語が並んでいる。

彼が興味を惹かれるのはKMFのみ。それ以外の物には、興味を示すことはほとんど無い。

性格などにかかなりの難があるが、KMF開発については文句のつけどころが無い実力の持ち主であり、ロイドも賛辞を贈るほどである。彼の開発するKMFは全てハイスペックばかりであると同時に、たいしたこともないパイロットに自らのKMFが使われることを嫌っていたため、表舞台にはほとんど出てきていない。

ラウンズの専属機関の主任に指名されたと聞くと、狂喜したらしい。ライのKMF操縦の実力も申し分なかったため、即答で承諾。

以後は、ライの専属機関『カリブルヌス』の主任としてKMF開発のみに力を注ぐ。

ちなみに、『カリブルヌス』とはアーサー王が手にしていた名剣の名称。

英語読みだと『カリバーン』となるが、ラテン読みだと『カリブルヌス』となる。

カルライナ・イリステラ

誕生日

皇暦1991年1月24日
(原作開始時、27)

血液型

A型

身長

159cm

体重

42kg

3サイズ

81、60、83

所属

『カリブルヌス』副主任

備考

クリスの研究所に以前から籍を置いている女性で、クリスの助手を務めており『カリブルヌス』の副主任も務めている。

ロイドと同等かそれ以上の変人でもある、クリスの唯一のストップパ
ー役である。

つい数年前までは第63師団師団長で、『黄泉への使者』^{ヘイド・メッセンジャー}の異名で知られ数々の戦場を転戦としていた。

だが、突然軍を除隊すると、クリスの属する研究所で技術者として働く。理由としては、本人曰く「疲れた」とのこと。

性格は、かつての異名からは想像もつかないほどに優しい性格をしているが、キレるとあのクリスも敬語になるほど。

クリスに対しては、結構な毒舌っぷりを発揮する。

背と胸が小さいのを気にしており、これらに関係することを口にする
と静かに怒りだす。

アルトウール・アヴェンジャー
Arthur・Avenger

型式番号

RZA-5AA

分類

ナイトオブブラウンス専用KMF

所属

ブリタニア

ナイトオブブラウンス

製造

『カリブルヌス』

生産形態

ナイトオブファイブ専用騎

全高

4・49m

全備重量

6・89t

推進機関

ランドスピナー

武装

MVS2×2

強化型スラッシュハーケン×4

可変式ライフル ジェノバ×2

（短銃、狙撃銃切り替え可）

特殊装備

ブレイズルミナス

乗員人数

1人

搭乗者

ライア・ファグラレーヴ

備考

このKMFは、クリスがロイドと一緒に大学時代に構想していたものをベースに開発された第7世代KMF。

クリスの信条によって一般騎士へのKMFは開発していなかったため、小さな研究所でいた時間が長く自分の理論を研究出来る時間があつたため、大部分はクリスのオリジナルで開発されている。

ライに合わせて徹底的にチューンされており、ライの高い指揮能力と1対1に持ち込もうとする戦術に合わせられている。

そのための武装として強化型ファクトスファイアと、クリストフが改良を加えた“MVS2”、超長距離狙撃モードに切り替え可能な可変式ライフル“ジェノバ”を装備している。

超長距離、および長距離モードに変更すると銃身がこれらに合わせて変形する。このことが、遠方への射撃を可能にしている。

使用中はファクトスファイアを展開して感度を上げなければならないため、エネルギー消費が著しく上昇する。

だが、クリストフのこれまでの研究が実を結んだのか、エネルギー消

費を4分の1にまで軽減することが出来た。

クリストフ個人の、「他の技術者に負けられるか」という感情により、研究資金をかなりつぎ込みサクラダイトを大量に使用。

結果的には、『ナイトオブブラウズ』全KMFの中で一番の出力を持つと同時に、遠中近の距離に対応できるオールラウンダーなKMFに仕上がっている。

ユーウェイン
U w a i n

型式番号 R Z A - 2 F

分類

『ナイトオブブラウズ』KMF

所属

ブリタニア

『ナイトオブブラウズ』

製造

ナイトオブツール専属機関『ヴェスタ』

生産形

ナイトオブツール専用騎

全高

4・96 m

全備重量

7・31 t

推進機関

ランドスピナー

武装

MVS（鎌）

MVS（隠し剣）×6

強化型スラッシュハーケン×4

特殊装備

ブレイズルミナス

乗員人数

1人

搭乗者

蘭 キキヨウ

備考

キキヨウの得意とする高速戦闘を実現するために、徹底的にチューンされている。

キキヨウ自身、女性ラウンズでは随一の操縦技術の持ち主で、高機動戦闘によるヒットアンドアウェイを主戦法としている。

そのため、関節部分への負担を減らすために緩衝材を1・5倍ほど多く使用している。

それと同時に、騎体をギリギリまで軽くしていることも、彼女の高機動戦闘を実現する要因となっている。当然、敵の攻撃を1発でも受ければ、致命傷は免れないことは確実。

基本武装は鎌の形を取ったMVS。

予備武装として、騎体の至る所に隠し剣が仕込まれている。武装からも分かるとおり、近距離戦を得意としている。

機体カラーは、キキョウのカラーでもある真紅で塗装。

名前の由来は円卓の騎士の1人、ゴール王ユリエンスの息子ユーウエイン卿から。

ブリュンヒルデ

B r u n h i l d e

型式番号

R P I - 0 0 1

分類

ワルキューレ・ナイツ

【天女騎士】専用量産KMF

製造

ブリタニア

『カリブルヌス』

生産形態

ワルキューレ・ナイツ

【天女騎士】専用カスタムKMF

全高

4・38 m

全備重量

6・74 t

推進機関

ランドスピナー

武装

ヴィングスコルニル

ハドロンライフル

スラッシュハーケン×4

特殊装備

ブレイズルミナス

乗員人数

1人

搭乗者

アルシェラ・イストリア

ジル・シウィリア

備考

ライ専属機関の【カリブルヌス】が、直属の【ワルキューレ・ナイツ天女騎士】のために開発した、第7世代相当KMF。

このKMFは、それぞれ個性の違う【ワルキューレ・ナイツ天女騎士】の合わせるためのベース騎として開発されたヴァルトヒルデを後方支援、及び指揮に特化させた騎体。

そのため、他の【ワルキューレ・ナイツ天女騎士】の騎体より高性能のファクトスファイアを搭載しているため、リーダーのカバー範囲が1・5倍ほど広くなっている。

そのため、このKMFは指揮を得意としているアルシェラとジルのために2騎開発されている。

さらに、当騎体には試作兵器としてハドロンを応用した武装を装備。

だが、あくまでも試作兵器のため、エナジーの消費などに大きく難を残しているため、本国への報告も含めて搭載されることとなった。

開発したクリス本人は、将来はアルトウールにも装備しようと考えている模様。

最後に、近接戦闘なった際のために2本に分離可能な長剣の“ヴィングスコルニル”を装備。

普段は背中に背負っている。

名前の由来はワルキューレの1人、ブリュンヒルデから。

ゲルヒルデ

Gerhilde

型式番号

RPI - 002

分類

ワルキューレ・ナイツ

【天女騎士】専用量産KMF

製造

ブリタニア

『カリブルヌス』

生産形態

ワルキューレ・ナイツ

【天女騎士】専用カスタムKMF

全高

4.38m

全備重量

6.91t

推進機関

ランドスピナー

武装

シュヴァンヴィルムス（ランス）

MVS2

スラッシュハーケン×14

特殊装備

ブレイズルミナス

乗員人数

1人

搭乗者

ウル・シウイリア

マリーカ・ソレイシイ

備考

ライ専属機関の「カリブルヌス」が、直属の【ワルキューレ・ナイツ天女騎士】のために開発した、第7世代相当KMF。

このKMFは、それぞれ個性の違う【ワルキューレ・ナイツ天女騎士】の合わせるためのベース騎として開発されたヴァルトヒルデを、近接戦闘に特化させた騎体。

このKMFはナイトオブワン、ビスマルク・ヴァルトシュタインの愛騎であるギャラハッドの思想を元に改良されている。

特筆すべきは、主武装となる巨大なランスである。

シュヴァンヴィルムスと名付けられたそのランスは、騎体の全長ほどの長さがあり、ギャラハッドの“エクスカリバー”同様、ランス

の刃部分にエネルギー流すことで攻防に優れた武器となる。

そして、武装の少なさを多少なりとも補うために、“スラッシュハーケン”も多数を装備。

両手の指先が“スラッシュハーケン”となっており、それによってコックピットを傷付けないように戦闘不能にすることも可能とし、標的の捕縛も得意としている。

なお、肉薄されての近接戦闘に備えて両腕には“ブレイズルミナス”を搭載されている。

名前の由来はワルキューレの1人、ゲルヒルデから。

ヴァルトヒルデ

W a l t h i l d e

型式番号

R P I - 0 0 0

分類

ワルキューレ・ナイト

【天女騎士】専用量産KMF

製造

ブリタニア

『カリブルヌス』

生産形態

ワルキューレ・ナイト

【天女騎士】専用カスタムKMF

全高

4・38 m

全備重量

6・57 t

推進機関

ランドスピナー

武装

MVS2×2

アサルトハドロン

スラッシュハーケン×4

特殊装備

ブレイズルミナス

乗員人数

1人

搭乗者

リーライナ・ヴェルガモン

備考

ライ専属機関の【カリブルヌス】が、直属の【ワルキューレ・ナイト天女騎士】のために開発した、第7世代相当KMF。

このKMFは、それぞれ個性の違う【ワルキューレ・ナイト天女騎士】に合わせるためのベース騎として開発され、戦局に応じて臨機応変に戦うことが可能。

この騎体はブリュンヒルデやゲルヒルデと違い、戦局に応じ戦うことを得意としている。

そのため武装には偏りが無く、ほとんどが一般的な武装となっている。

変わっているのは、ブリュンヒルデ同様に試験装備されているハドロンを高速で撃ちだすことを可能した、“アサルトハドロン”である。

だが、この装備もブリュンヒルデ同様、将来のためのデータ収集として試験装備されている。

「スザク!!」

「ルルーシュ!!」

かつての親友は銃を向け合う。

その瞳の宿るは、憎しみと怒りの炎。

静まることを知らず、これらの感情は強く燃え盛る。

両者は同時に発砲した。

ルルーシュの放った銃弾はスザクのインカムに命中し、スザクの放った銃弾はルルーシュの持つ銃を弾いた。

瞬間、スザクは跳躍するとルルーシュに飛びかかった。

「あつ、ゼロ!!」

「こいつはルルーシュだ!!」

カレンが駆け寄ろうとするが、スザクはカレンへと銃だけを向ける。

「日本人を、君を利用した男だ!そんな男を護りたいのか、君は!!」

スザクは、ルルーシュの胸に取り付けられた【流体サクラダイト】を強引に外すと、遠くへと投げ捨てる。

カレンは涙を流しながら踵を返し、遺跡から去って行った。

「ゼロを、君を終わらせる」

地面に倒れるルルーシュを見下ろし、そう告げた。

その頃には、すでにトウキョウ政庁での戦闘も終了しており、続々と【黒の騎士団】構成員を捕虜としていた。

スザクはルルーシュを拘束すると、秘密裏にブリタニア本国へと移送。

皇帝シャルルの前に引き出した。

スザクはルルーシュを右手で床に押し付け、左手は胸の前で折り曲げられていた。

「元第17皇位継承者ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。久しいなあ、我が息子よ」

「貴様あ……！」

「【ギアス】は使わせない」

玉座に座るシャルルの薄い笑みを浮かべながら皮肉の言葉に、ルルーシュは怒りを覚え顔を持ち上げようとする。

だが、すぐにスザクによって再び床に押し付けられる。

「恐れながら、申し上げます。陛下、自分を帝国最強の十二騎士【ナイトオブブラウズ】にお加えください」

「ゼロを捕らえた褒美を寄越せと？」

本来であれば、不敬ですぐに首を刎ねられても文句は言えない発言。

一軍人であり、ナンバーズでもあるスザクの言葉。

口調こそ丁寧だが、簡単に言えば褒美を要求しているに過ぎない。

「お前……!!」

「言っただよ、ルルーシュ。俺は、中からこの世界を変えると」

「友達を売って出世するのか!」

「そうだ」

ルルーシュの問いに、スザクはハッキリと肯定の言葉を返した。

その答えに、ルルーシュは思わず目を見開き驚きを露わにする。

「良からう。今の答え、気に入った。では、【ナイトオブ라운ズ】に命じる。ゼロの左眼を塞げ」

「Yes, your majesty」

シャルルは立ち上がりながら、라운ズの一員となったスザクに命じる。

スザクは右手でルルーシュの身体を無理矢理起こし、左手の掌で左眼を塞いだ。

「皇子でありながら反旗を翻した不肖の息子。だが、まだ使い道はある」

「な、何を……」

「記憶を書き換える。ゼロであること、マリアンヌのこと、ナナリ

ーのこと」

「まさか、【ギアス】！？」

目前まで近付いてきたシャルルの瞳を見て、ルルーシュは気付いた。

シャルルの両目に、【ギアス】の翅が浮かんでいるのを。

シャルルもルルーシュと同じ、【ギアス】能力者。

「すべてを忘れ、只人となるがよい」

「やめろ！また俺から奪うつもりか！母さんを、ナナリーまで！！」

「シャルル・ジ・ブリタニアが刻む」

「やめろおー！！」

「新たな偽りの記憶を」

「只人：普通の人、ありきたりな人の意」

ルルーシュは必死に身体を動かして抵抗を試みるが、スザクは決して放すことはなく拘束している。

ルルーシュの制止も空しく、シャルルは両手を大きく広げシャルルの【ギアス】が発動される。

ナナリーを忘れ、母マリアンヌを忘れ、ゼロであったことを忘れ去ったルルーシュ。

ルルーシュが気絶すると、シャルルは踵を返し再び玉座に腰を下ろす。

「ご苦労だったな、枢木スザクよ。叙任式は後日、改めて執り行う。

貴様には、7の数字を与える」

「はっ、ありがとうございます」

その時、玉座の間の扉が開くと誰かがやって来たようだった。

「？」

玉座の間は明かりが点けられていない。

電気が点けられているのは、シャルル周辺だけだ。

そのため、入り口周辺はハッキリ見えない。

玉座の間に響くのは、靴音のみ。

「・・・・・・・・」

だが、シャルルだけは入って来た人物が誰か分かっているようだった。

その証拠に、その口元には笑みが浮かんでいる。

そしてついに、ようやく誰か分かった瞬間、スザクの背筋に寒気が走る。

「！」

姿を見せたのは、黒衣に身を包んだライだった。

以前、ライが纏っていたのは蒼のマントだった。

だが、今はどういいうわけか黒のマントだった。

同時に、スザクは感じた。

以前会った時とは、別人じゃないかと思うほどだった。

ライの全身から発せられる威圧感、眼つきの鋭さ。

今のライは、研ぎ澄まされた抜き身の刀のようだった。

「ライか。何用だ」

「ゼロの素顔を見に來ただけだ」

ライは横たわるルルーシュを足蹴にして仰向けにして、顔を確認する。

「ふん。やはり、ゼロはルルーシュか。・・・殺しておくべきだったか」

気絶するルルーシュを見て、ライはそう吐き捨てた。

「ほう、気付いていたのか」

「察しはついていた。だが、甘かったようだ」

「！」

シャルルの問いに素っ気なく答えると、ライはルルーシュを睨み付けると横顔を思いつ切り踏みつけた。

気絶しているとはいえ、ルルーシュの表情が苦悶に変わる。

以前のライでは考えられなかった行動に、スザクは言葉を失った。

「本当に、さつさと殺すべきだった。わざわざ【ギアス】で記憶を書き換えたんだ。ルルーシュを何に使うつもりだ」

ライはルルーシュを踏みつけながら、シャルルへと視線を移し問いかける。

ライの口調に、今まで黙っていたスザクが口を挟んだ。

「ライ！陛下に向かって！それに、どうして【ギアス】のことを！」
「黙れ。私はシャルルと話している。貴様とは話していない」
「っ！」

だが、ライの睨みによってスザクも思わず口を閉ざす。

「枢木よ、ライは良い。わしが許可したのだ」
「・・・Yes, your majesty」

シャルルの言葉によって、スザクは渋々ながらも引き下がった。

「ルルーシュの使い道だったな。撒き餌に使っただけよ。ただの魚ではく、極上のものを捕らえるためのな」

ライの問いに、シャルルはそう答えた。

誰を誘き出すのかは知らないが、シャルルの狙いに関係することなのだろうとライは直感した。

「・・・ならば、その後に殺すでしょう。用は済んだ。私は失礼する」

ライはルルーシュから足をどけると、踵を返して玉座の間を後にする。

「枢木よ、貴様も下がれ。ルルーシュのことは我々でやる」

「Yes, your majesty」

シャルルはスザクにも退出するよう命じると、スザクは命令通り部屋を後にした。

そしてスザクは、前を歩いているライを呼び止めた。

「ライ」

ライは足を止めると、振り返りスザクを見る。

「何の用だ」

「えっ、それは・・・」

ライにそう言われ、スザクは口ごもった。

無論、聞きたいことがあった。

その変わりようについて、何故【ギアス】を知っているのかを。

だが、ライの感情の無い瞳に見据えられ、言葉が出て来なかった。

「・・・スザク、すまなかったな」

「えっ？」

スザクがどうしたものかと悩んでいると、突然ライが謝ってきた。
謝られる覚えのないスザクは混乱してしまう。

「アヴァロンからトウキョウ租界に向けて出撃した時、別れ際に言
ったことを覚えているか」

「覚えてるよ。憎しみに支配されるな。怒りは力となるが、憎しみ
は滅びの道、だったね」

「今となっては、言ったことを後悔している」

ライはそう自嘲気味に呟くと、ライの唇の端が釣り上がる。

「！」

そのライの笑みを見た瞬間、スザクの額に冷や汗が浮かぶ。

「（何て、冷たい笑み……）」

「今の私は、これほどまでに憎しみに満ちていると言つのに」

「ライ……」

スザクは、ライの瞳に垣間見えた憎しみに気付いた。

ライは止めていた足を動かし、再び一人歩きだした。

「ライ！どうして、【ギアス】のことを！」

「私も【ギアス】を持っているからだ」

「……！」

ライの背中越しの言葉に、スザクは目を見開いて驚いた。

「ライ、それって!」

「それより、会いに行ったらどうだ?」

「?」

そう言われても、スザクにブリタニア本国に知り合いなどいるはずもない。

だが、ライのその次に発せられる言葉にスザクは再び驚愕することとなる。

「ナナリーは本国に居る」

「なっ!!」

「首都ネオウエルズにある、ベリアル宮にな」

「どうして、ナナリーが!」

「その問いが知りたければ、シャルルに聞け。私は勅命に従ったままでだ」

ライは立ち止まることもなく、歩きながらスザクにそう告げ去って行ってしまった。

「どうして、ナナリーがブリタニア本国に……。ライがトウキョウ決戦の時に居なくなったのも、そのためか」

スザクは、徐々に遠くなっていくライの背を見ながら呟くのだった。

Episode - 0 それでも上へ 11/23改(後書き)

今回は、スザクがルルーシュを捕らえて、シャルルと謁見したすぐ後です。

つまり、トウキョウ決戦からそれほど時間は経っていません。

そして狂王となっているライ。

かなり変わっています。

ルルーシュのファンには申し訳ないです。

ライの怒りを表現したかったのと、スザクにライが変わったことをよく理解させるためです。

恐らく、原作開始前までの数話は更新します。

原作突入時になると、更新はややストップ。

ストックを作った後、更新を再開すると思います。

Episode - 1 牙

数日後、ライは自ら車を運転しある場所に向かっていた。

ラウンスであるライならば、運転手ぐらいいは付いても不思議ではない。

さらに、ライはファグラレーヴ侯爵家の人間だ。

だが、ライはそれを断り、自ら運転することになっている。

ライが向かったのは、【カリブルヌス】の研究所である。

クリスやカルラを始めとした【カリブルヌス】のメンバーは、トウキョウ決戦後に本国に帰還してきた。

その後、エリア11に向かう前に本国で使用していた研究所は破棄し、大きめの研究施設に移ることになった。

アルトウールだけなら問題無かったが、ワルキューレ・ナイツ【天女騎士】のKMFもあるため移動したのだ。

ライは【カリブルヌス】に到着すると、【カリブルヌス】の新研究所に足を踏み入れた。

ライは研究所の奥に進みながら、他のメンバーからの挨拶に応えていく。

ライは奥へと進むと、左右に並ぶワルキューレ・ナイツ【天女騎士】の乗るKMFを見な

がら、最奥にあるアルトウールの前に立つ。

「あら、ライちゃん。来てたのね」

「おはようございます、ライさん」

奥でアルトウールの調整をしていたクリスとカルラも、ようやくライに気付いた。

クリスはいつもと変わらぬ様子で、カルラは頭を下げた挨拶した。

ライはアルトウールを見上げながら、クリスに問う。

「クリス、アルトウールの改良作業はどうだ」

「今のところは、順調よん」

「“輻射波動”は？」

「あれをアルトウールに装備するのは難しいわねん。データで見たあの騎体、紅蓮だったかしら？あの騎体とアルトウールとは、そもそも思想が違うもの」

確かに、思想は大幅に違う。

紅蓮は武装からも分かる通り、近接戦闘を主眼に置き“輻射波動”が最大の武器となっている。

だが、アルトウールは違う。

アルトウールは近距離、中距離、場合によっては遠距離からでも戦えるように設計されている。

もし“輻射波動”を装備したら、アルトウールの各所に齟齬が生じ

る可能性が出てくる。

装備するなら、一から造る必要がある。

「なるほどな」

「“ 輻射波動” を装備するのは無理だけど、“ ジェノバ” の弾を“ 輻射波動” にしようかと思ってるわ」

「可能なのか？」

「時間はかかると思うけど、可能だと思うわ」
「そうか」

クリスの言葉にライは素っ気なく答えると、突然クリスがクネクネと身体を揺らし始めた。

「それにしても困ったのは、装備したいものが多すぎることねん。

“ ハドロン砲” も装備したいし、【ドルイドシステム】も搭載したいのよねん。【ゲフィオンディスターバー】を応用したら、ステルス機能につながるはず。やゝだわゝ、楽しみでビンビンになっちゃうわゝ」

「（何が……。いや、聞くのは止めよう。とんだやぶ蛇になりそうだ）」

腰を左右に動かしながら回転するという奇怪な動きをするクリスから離れ、ライは【ワルキューレ・ナイト天女騎士】のKMFの整備をしているカルラに近付いて行く。

「カルラ、そちらはどうだ？」

「はい、ご報告します。まず、全騎に【フロートユニット】の装備は完了。ですが、予算の都合上、ライさんに搭載されるものと比べやや質が落ちてしまいました」

「5 騎分だからな。それは仕方ないか」

「はい。それと、ライさんのアルトウールも含めて全 K M F の出力を上げました」

「クリスは言っただけでなかったか？」

「興奮して忘れてるんでしょう」

そう言っただけで、2 人はクリスへと視線を移した。

そこには、相変わらず自分の世界に入ってしまったっているクリスがいた。

腰の左右運動に前後運動が加わり、先程の奇怪な行動がパワーアップしていた。

見てはいけないものを見てしまった 2 人だった。

2 人だけでなく、【カリブルヌス】のメンバー全員がクリスを視界に入れないように努力していた。

「それで、アルトウールは他に何が変わったんだ？」

「他には、胸部・両脚部にも【ブレイズルミナス】を追加装備しました。各所の【ブレイズルミナス】を稼働させれば、錐体状の騎体を覆う【コアルミナスコーン】となります」

「防御力が上がったか」

2 人はあの状態のクリスを見てしまったことを激しく後悔しつつも、話を続ける。

クリスのストッパーであるカルラムも、さすがにあの状態のクリスには手を出したくないらしい。

ワルキューレ・ナイツ

「【天女騎士】に試験装備されていた、“ハドロン砲”関連の武装も完成。これで、以前のように激しいエナジー消費は解消されたと思います」

「順調だな」

「全体的はそうです。ですがやはり、最終的にはアルトウールの改良作業に時間が掛かると思います。当分は、出撃は無理ですね」

「そうか。私から皇帝陛下に申し上げておく」

ライはしばらくカルラと話した後、【カリブルヌス】の研究所を後にした。

クリスはとうとう、ライが出て行くまで戻って来ることはなかった。

クリスが我に返ったのは、キレたカルラが蹴り飛ばしたからだった。

ライは【カリブルヌス】から、ラウンズがよく集まるラウンジに向かった。

ラウンズがよく集まると言っても、実質的にはラウンズ専用の部屋になってしまっている（以後、専用部屋）。

専用部屋に入ると、そこには数人のラウンズがいた。

アーニヤにジノ、キキヨウとノネットがいた。

「おつ、ライじゃないか。久し振りだな」
「ああ」

ノネットの言葉に素っ気なく返す。

ライは部屋に備え付けられているコーヒーメーカーから、コーヒーを紙コップに注ぐ。

コーヒーの入った紙コップを持ち、ライは椅子に腰を下ろし懷から本を取り出した。

ちなみに、コーヒーはブラックだ。

「そうだ。ライ、聞いたか？」

「何のことだ」

「今度、新しいラウンズが任命されるそうだ。ヴァルトシュタイン卿によると、キキヨウと同じナンバーズ出身者みたいなのだが」

そう言いながらノネットは、隅に座って読書をしているキキヨウへと視線を移す。

隅と言っても、それほど距離は無いため聞こえているだろう。

だが、そんなことに欠片も興味はないキキヨウは、本から目を離さない。

ちなみに、キキヨウが読んでいる本は「男を落とす100の掟」という本だ。

ノネットたちからは、本のタイトルは見えないため気付いていない。

キキヨウが飲むのは、激甘のカフェラテだ。

「知っている。名前は枢木 スザク。元日本国首相の息子だ」

「よく知ってるな、ライ」

「エリア１１で会ったからな」

「そういえば、ライはエリア１１に居たんだったな」

ライは本に視線を落としながら言った。

スラスラと本人の情報が出てくるライに、ジノが驚きの声を上げる。

「それで、そいつの実力はどうなんだ？」

「どちらかといえば、高い部類に入るだろう。甘いところはあるがな」

「へえ……。楽しみだな」

ライから返ってきた答えに、ジノは笑みを浮かべた。

「ジノ。御前試合の相手、志願するつもり？」

今までブログ更新で忙しく、黙っていたアーニヤが顔を上げジノに問う。

「ああ。面白そうじゃないか」

「ふーん」

「アーニヤは？」

「興味無い」

アーニヤの視線は再び携帯へと向けられており、ジノへの答えは非

常に素っ気ないものだった。

「ノネットはどうだ？」

「私か？そうだな。興味はあるが、今回はジノに譲るさ」

「珍しいな。ノネットがそんなことを言うなんて」

「残念ながら、私はEUへの派遣が決まっている。叙任式に出席したら、すぐにEUだ」

現在、EU戦線にはラウンズとしてモニカが派遣されている。

だが最近、EUが近日中に大增援を派遣するという情報を、情報部が入手したのだ。

それが本当ならば、モニカ1人では厳しいだろうと言うことで新たにノネットの派遣が決定したのだ。

「なるほどな。EUも必死だな」

「それはそうだろう。それに、噂では最近白ロシア戦線もキナ臭いって話だ。近いうちに、誰か派遣されるかもしれんな」

ノネットは思い出したようにそう言った。

白ロシア戦線。

その名の通り、ロシア方面で争っている戦線だ。

こちらにも、増援が派遣されるのではないかとの噂がある。

もしそれが本当なら、EU方面だけではなくこちら側にもラウンズを派遣することになるだろう。

「恐らく、スザクを派遣することになるだろう」

「どうしてだ、ライ」

「スザクはナンバーズだ。皇帝陛下が承認したとはいえ、他の貴族や軍人共は面白くないだろう。スザクの実力を示すためには、必要なことだ」

「そういえば、私とアーニヤもラウンズに就任してすぐEUに派遣されたな」

ナンバーズは区別するというのは、ブリタニアの国是だ。

貴族や軍人に至っては、よりそれが顕著になって来るだろう。

ナンバーズに対する激しいまでの嫌悪感。

スザクのユーフェミアの騎士叙任の際にも、それがよく現れていた。

周囲の人間を黙らせるためには、やはり力を見せつける必要がある。

自分たちより上の力を見せつけければ、奴らもおとなしくなることだろう。

表面的には、だが。

「それに、すでにラウンズには同じナンバーズのキキョウがいる。見下しているナンバーズが、ラウンズにまた入るかもしれないんだ。風当たりは当分強いだろう」

「やれやれ、バカな貴族や軍人には分からんさ。ラウンズは力こそがすべてだ。力があれば、ブリタニアでは上に行ける」

「まあそれはともかく、私は枢木との対戦が楽しみだよ」

さらに続けるライの言葉に、ノネットは険しい表情で呟いた。

ノネットは、ライよりラウンズとしての期間が長い。

当然、キキヨウがラウンズに就任した時の貴族たちの反応を良く知っていることだろう。

だが、そんなことは微塵も気にしていなかったキキヨウは、うるさい貴族を睨むことで黙らせて見せた。

そのことを思い出したのか、ノネットは急に笑い始める。

「あいつらの顔、傑作だったよ。お前たちにも見せてやりたいくらいだ」

「キキヨウの御前試合は、誰とだったんだ？」

「ドロテアだったな。結果的にはキキヨウが勝ったんだが、キキヨウに負けたことで認めたんだろう。以前よりは、態度も柔らかくなつたよ」

ライ以外の視線がキキヨウへと向けられる。

だが、そこにキキヨウは居なかった。

と思いきや、新しくコーヒーを注いでいるようだった。

恐らく、驚くほど砂糖を入れているのだろう。

「ライは、前線に出ないのか？」

「KMFは改良作業中だ。当分は無理とのことだ」

「なるほどな」

ライは時間を確認すると、本を閉じ立ち上がった。

「そろそろ私は失礼する」

ライは残っていたコーヒーを一気に流し込むと、紙コップをゴミ箱に放り込むと専用部屋を出て行った。

キキョウ side

私はわずかに視線を上げ、部屋を後にするライの背を見送る。

以前会った時は違う、今のライ。

別人と思うくらいだ。

鋭い目つき、人を威圧するような雰囲気、口調も変わったように感じる。

マントの色も、黒に変えたらしい。

「なあ、ノネット」

「何だ」

「ライに何があったんだ？さすがに変わりすぎだろ。別人と思ったくらいだ、私は」

私がライについて考えていると、エニアグラムとヴァインベルグも同じことを話し始めた。

「アーニヤもそう思うだろう？」

「私も、そう思う。（でも、あれはあれでカッコいいかも）」

エニアグラムに続き、アールストレイムにも問いかけるヴァインベルグ。

アールストレイムの頬が赤くなったのは、私の気のせいだろうか。

「マントの色まで変えたみたいだしな」

「ライによると、今の私に蒼は似合わない、だそうだ」

「どういう意味だ」

「さあな。だが、あれほど変わったんだ。余程のことがあったのだろっ」

ライのすべてを変えるほどの、余程のことか。

「キキヨウはどうだ？」

「知らない」

エニアグラムが私に心当たりを聞いてくるが、残念ながら無い。

「まあ、現時点では私たちに出来ることは無いな。ライが言ってくれるのを待つくらいだな」

「まあ、そうなんだけどな」

確かに、私たちにはどうすることも出来ない。

問いただしたところで、答えてくれるとは思えない。

けど、やっぱり気になる。

・・・私も帰ろう。

私はカフェラテを飲み干すと、本を閉じ立ち上がる。

「帰るのか、キキヨウ？」

「ああ」

私は空になった紙コップをゴミ箱へと投げる。

だが、外れてしまった。

「・・・・・・・・」

チラッと振り向くと、エニアグラムがニヤツと笑みを浮かべていた。

ヴァインベルグとアールストレイムは、背を向けていたので見られていないようだ。

「（恥ずかしすぎる・・・）」

私は入らなかった紙コップを拾い、ちゃんとゴミ箱に入れその場を足早に立ち去った。

キキヨウ side end

ライは車を運転し、帰宅した。

屋敷の中に入ると、出迎えた執事やメイドたちに挨拶を返ししながら自室へと歩いて行く。

自室のベッドには、A・A・が横になっていた。

ライは、A・A・が部屋に居ることは気にすることもなく、部屋の中に足を踏み入れる。

マントをハンガーに掛け、クローゼットへ。

白の騎士服と下も脱ぐと、同じようにしてクローゼットへと仕舞う。
代わりに、ライは黒の私服を身に纏う。

「私が部屋に居るんだから、少しは恥ずかしそうにするとかしないか？」

「何の用だ」

A・A・の問いは無視し、ライは用件を問いかける。

本国に来てから、A・A・はライと行動を共にするようになった。

A・A・に家などあるはずもないので、必然的にファグラレーヴ家の屋敷に住んでいる。

その時は両親から、主に父親がやけに興奮して質問してきた。

だが、ライが完全無視をすることで肩を落として諦めていた。

ライは踵を返すと、部屋に備え付けられているコーヒーマーカーへと歩いて行く。

カップを手に取り、コーヒーを注いでいく。

「大丈夫かなと思ってね」

「何がだ」

「……あなたの心が」

「……」

A・Aの呟きに、ライのコーヒーを注ぐ手が止まる。

「……どういう意味だ」

「そのままの意味。復讐をしたところで、彼女は」

「死人は何も思わない、感じない。死人が何かを感じる。そんなものは幻想だ。私は、私のためにゼロを殺す」

ライはコーヒーをカップへと注ぎ終わると、テラスへと歩いて行く。

A・Aはベッドから下りると、テラスに出たライを追い掛ける。

「……」

「ルルーシュは必ず、いつか記憶を取り戻すだろう。シャルルの計画のためには、ルルーシュに【ギアス】を与えた女、C・Cが必ずらしいからな」

「計画って？」

テラスに出たA・A・は、眼下に見える庭を見るライに問いかける。

眼下の庭では、本国へと移ったヴィレッタがストレッチをしていた。

「シャルルの計画など、どうでもいい。問題なのは、ルルーシュが記憶を取り戻しゼロとして再び立つかどうかだ。いや、ルルーシュなら必ず立つ。ナナリーを取り戻すためにな」

「その時に、目的を果たすと言うこと？」

「そうだ。その時こそ、私は奴を殺す」

ライが口にした、殺すの言葉と同時にライの目つきが鋭くなる。

「そうだとしても、まだまだ先のことだろうがな。今は、その時のために牙を研ぐでしょう」

ライはフツと笑みを浮かべると、再び部屋の中へと戻っていく。

今はまだ準備期間。

憎きルルーシュを討つため、ライはその牙を極限まで研ぎ続ける。

「まったく、待ち遠しいな。ルルーシュ」

Episode - 1 牙（後書き）

お待たせしました、更新です。

今回は久々のキャラと、キキヨウの登場です。

そして、クリスがやっちゃってます。

書いてて楽しいキャラではあるが、さすがにキツイか。

訳の分からない回だったら、申し訳ないです。

それはともかく、以前R2を最初から見直していた時のことです。

R2の1話で、バニー姿のカレンが登場。

その時思いました。

カレンはルルーシュに渡さねえ、と。

かといって、ライとくつつくわけではないですの「了承を」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5407y/>

コードギアス AVENGER ~ 狂王のライ ~

2011年11月24日13時58分発行